「米一粒を大切に思う気持ち」

壱岐市立霞翠小学校　六年　野元　咲良

「おいしい！ごはんおかわり！」

そう私が言うと父よりも母よりも誰よりも喜んでご飯を注いでくれるのが私の大好きな祖父である。

「お茶わんに注いだご飯は、一粒たりとも残してはダメだよ。お米一粒、一粒には命が宿っているのだよ。感謝して食べないとね。」

と繰り返し話をしてくれるのも祖父である。

私の祖父は、幼い頃戦時中を生き、様々な体験や苦労をしている。だから、食べ物の大切さ、特にお米の大切さを常に私たち家族に話をしてくれる。最初は、またか、、と思っていたが、学校の授業で戦争のことについて学び、他人ごとではなくなってきた。戦争中は、お米でできたご飯やおにぎりはぜいたく品であったという。お米は兵隊さん用に送るため、家にいる人は麦ご飯ばかりだったという。ようやく戦争が終わって、兵隊さんが戻

ってきてから、やっと麦とお米を混ぜてご飯やおにぎりを食べられたという。祖父は、お米は白くきれいで粘りがあるので、おにぎりもできて本当においしかったという。当たり前の様に食べている今では、考えられない世界である。ここで、私のお米一粒に対する考え方が大きく変わった。大切にしなければと誓った。毎日毎日、ご飯を食べている私たちにできることはないか考えた。最初は思い浮かばなかったが、祖父の話を思い出し、私自身がお米の大切さを実感することだと考えた。

そうして行ったのが、自分自身が実際に米作りを行ったことである。農家の人の苦労や、お米の大切さを感じるために一番大切なことである。祖父が米作りをしており、私も田植えや稲刈りは学校でも行っていたので、ある程度分かっているつもりであったが、実際にはそう簡単にはいかなかった。私が何よりも大変だと感じたことは、水の管理である。米作りに欠かせない水。足りなくなったら、水

を出し、水が多いと水を抜く。田んぼの大きさを知り尽くしている祖父に聞きながら、朝方早くから、夜中まで水の出し入れを行った。祖父は足が悪いので、水源まで降りていき、水を出し入れすることがこんなにも大変なのかと改めて感じた。一方で、米作りをしての喜びもあった。稲刈りはコンバインを使って行うが、機械でできない所は手作業で行う。私は、両親や姉妹と一緒に落ちている稲を拾う作業である。稲一本にもたくさんの穂が実っており、一本も無駄にしないように拾った。たくさん拾うと何束にもなり、祖父から感謝の言葉を言われた時は、力になれたことがうれしかった。そして、秋にできたお米を食べた時には、今まで以上においしく感じた。

お米は日本人の主食である。だからこそ、農家の方が汗水流し、頑張って作っているお米を一粒たりとも粗末にせず、感謝して食べなければならない。祖父から学んだ米一粒を大切に思う気持ちである。